

# ゴール型（サッカー）における技能の向上を図る学習指導の工夫

## —「サッカーカパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習を通して—

尾道市立三成小学校 重光 泰徳

### 研究の要約

本研究は、ゴール型（サッカー）における技能の向上を図る学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、体育科において、課題発見・解決学習を通して技能の向上を図ることが重要であることや、ゴール型（サッカー）における技能の向上を図る上で、「ボールを持たないときの動き」に課題があることが分かった。そこで「ボールを持たないときの動き」の技能の向上を図るために、自分の動きを可視化し、課題を発見させ、解決させる「サッカーカパワーアップシート」を活用し、具体的な解決策となる動きを見付け、意図を明確にした練習によって動きを身に付ける学習を行った。その結果、パスを受けられる場所に動いたり、適切な場所に立って守ったりすることができるようになった。このことから、「サッカーカパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習を行うことは、ゴール型（サッカー）における技能の向上を図るために有効であるといえる。

**キーワード：**技能の向上 サッカーカパワーアップシート 課題発見・解決学習

## I 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説（平成20年、以下「解説」とする。）には、体育科の目標に示されている生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の一つとして「運動の技能」<sup>(1)</sup>が挙げられている。また、「体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年、以下「WG 審議の取りまとめ」とする。）によると、基礎的な動きや基本的な技能を身に付けるためには、課題を発見し、その解決に向けた主体的・協働的な学習過程を通して指導することが示されている<sup>(2)</sup>。

「解説」によると、ゴール型における技能は、「ボール操作」及び「ボールを持たないときの動き」で構成されている<sup>(3)</sup>。そのうち、ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つことなどの「ボールを持たないときの動き」の方が、児童にとって難しい傾向にある。先行研究には、教師が状況を設定したり、ルールを制限したりするタスクゲームなどを使っての指導はみられるが、児童自らが自分の動きを分析し、それに基づいて課題を解決していく学習活動に焦点を当てた研究は少ない。

そこで、自分の動きを可視化し、課題を発見させ、解決させる「サッカーカパワーアップシート」を開発する。具体的には、身に付けるべき技能とループリックが明示された「サッカーカシート」、運動量、

パスの成功数などの動きを記録し分析する「課題発見シート」、ボールを持たないときの動きのパターンが示された「サポート力パワーアップシート」である。児童は、「サッカーカシート」で身に付けるべき技能を自覚する。その上で、「課題発見シート」と「サポート力パワーアップシート」で、自分の動きを客観的に認識し、効果的な動きのパターンと自分の動きを比較・分析して、課題を発見する。そして、具体的な解決策となる動きを見付け、意図を明確にした練習によって動きを身に付ける。

以上のように「サッカーカパワーアップシート」を活用して課題発見・解決学習を行わせることによって、ゴール型（サッカー）における技能の向上を図ることができると考え、本研究主題を設定した。

## II 研究の基本的な考え方

### 1 ゴール型（サッカー）における技能の向上について

#### （1）技能の向上の重要性

先に述べたとおり、「解説」には、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の一つとして、運動の技能が挙げられている<sup>(4)</sup>。

塩野克己（1996）は、「体育にとって最も大切な学習内容は、運動財を子どもや生徒たちに財産として

身についてやることである。それによってはじめて彼らが生涯スポーツのなかで、それらの運動財をもとに一生楽しむことができるようになるのである。」<sup>1)</sup>と述べている。

運動財（動きの財産）を身に付けるためには、どの児童にも身体能力の個人差に合わせ、技能の向上に向けた学習に取り組むことが大切である。

これらのことより、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の一つである技能の向上を図ることが重要だといえる。

## （2）ゴール型（サッカー）において技能の向上を図る研究の意義

小谷川元一（1994）は、サッカーの授業を行うときに、教師にとって切実な問題として、「手以外の部位でボールを操作することで、技能が伸びないこと」

「学年が進むにつれ、個々の児童の技能差が著しくなること」「男女の技能差が生じ、学習形態の設定の仕方が難しい」ことを挙げている<sup>（5）</sup>。また、林俊雄（2014）は、「サッカーは、ボールゲームにおいてもボールの扱いは大変難しく、その技能習熟も手を使うボール操作系のスポーツよりも至難であることが大きな課題とされてきた」ことを述べている<sup>（6）</sup>。さらに、体育科の運動領域には教科書が無く、向上させたい技能について、教師によって具体的なイメージが違うことがある。そのため、学習指導の工夫が明確にならず、技能の向上が不十分な児童がいる。松本靖ら（2007）は、サッカーの学習を楽しめなかつた児童の多くが、技能の向上が不十分であったと報告している<sup>（7）</sup>。稿者の実践を振り返っても、様々な技能の向上を図る練習をしたにも関わらず、技能の向上が十分に図れない児童がいるという経験がある。

これらのことより、ゴール型（サッカー）において技能の向上を図る研究は、意義があると考える。

## （3）ゴール型（サッカー）における技能

ゴール型（サッカー）における技能の向上を図るためにには、技能を整理したり児童にも分かる形で明示したりする必要がある。

「解説」には、「ボール運動系における技能は、『ボール操作』及び『ボールを持たない動き』で構成されている」<sup>（2）</sup>と示されている。ゴール型の「ボール操作」は、シュート・パス・キープ、「ボールを持たないときの動き」は、空間・ボールの落下点・目標（区域など）に走りこむ、味方をサポートする、相手のプレーヤーをマークするなど、ボール操作に至るための動きや守備にかかる動きに関する技能が示されている<sup>（8）</sup>。

以上のことより、第5学年及び第6学年で例示されているゴール型の五つの技能は、表1のように整理される。

表1 ゴール型における技能を整理したもの（第5学年及び第6学年）<sup>（9）</sup>

ボールを持たないときの動き	ボール操作
ア ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと。	エ 近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。
イ 得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートすること。	オ 相手にとられない位置でドリブルすること。
ウ ボールを保持する人とゴールの間に体を入れてシュートを防ぐこと。	

## （4）ゴール型（サッカー）における技能の向上を図る学習指導の工夫について

吉永武史（2009）は、「ボールゲームにおいてゲームパフォーマンスの向上を図るために、パスやシュートなどの『ボール操作の技術』のみならず、ボールを持たない動きについて学習する必要がある」<sup>（3）</sup>と述べている。しかし、稿者のゴール型（サッカー）における技能の向上を図った授業実践を振り返ってみると、児童の「ボール操作」に重きを置いた学習指導が多く、「ボールを持たないときの動き」について、技能の向上が不十分であった。

「学校体育実技指導資料第8集ゲーム及びボール運動」（平成22年）には、指導者が、発達の段階に応じて必要な技能を児童が取り組みやすいように工夫する必要があることが示されている<sup>（10）</sup>。つまり、技能の向上を図る学習指導の工夫の重要性が述べられている。

これらのことより、本研究では、ゴール型（サッカー）における「ボールを持たないときの動き」の技能の向上を図る学習指導の工夫について考察することとする。

## 2 「サッカーカパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習について

### （1）体育科における課題発見・解決学習を通して技能の向上を図る重要性

「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」（平成27年）では、これから求められる学習について、子供たちの理解を促すために、まず興味を喚起する動機付けを行い既有知識だけでは十分ではないという課題意識をもたせ、必要となる知識や技能を習得しながら課題解決に向けた学習活動を行うことの重要性が述べられている<sup>（11）</sup>。

さらに、広島県教育委員会（平成26年）は、広島

版「学びの変革」アクション・プランにおいて、「主体的な学び」を促進するために、各教科等の学習において課題発見・解決学習を推進している<sup>(12)</sup>。

「WG審議の取りまとめ」では、「育成を目指す資質・能力を踏まえた教科等目標と評価の在り方にいて」の中で、小学校体育科の指導においては、「課題を発見し、その解決に向けた主体的・協働的な学習過程を通して、心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」<sup>4)</sup>とあり、その一つとして「基礎的な動きや基本的な技能」を挙げている。これらのことより、課題発見・解決学習が推進されるとともに、体育科においても、課題発見・解決学習を通して、技能の向上を図ることが重要であることが示されているといえる。

## (2) 課題発見・解決学習のための「サッカーカパワーアップシート」

本研究では、課題発見・解決学習のために「サッカーカパワーアップシート」を活用する。右の図1に示す「サッカーカパワーアップシート」は、「サッカーカシート」「課題発見シート」「サポート力パワーアップシート」の総称である。「サッカーカシート」にある七つの力をサッカーカ力とする。サッカーカの表現は、児童に分かりやすいものとした。

「サッカーカシート」のサポート力、ビューティフルサポート力、ディフェンス力、パス力、ドリブル力のレベル3は、それぞれ表1に挙げたアからオの五つの技能と対応している。ワクワク力、作戦力はそれぞれ、「小学校学習指導要領第2章第9節体育」に示されている態度、思考・判断の内容と対応している。

「課題発見シート」は、「ボールを持たないときの動き」を分析し、その原因を考え、課題を見い出すためのものである。

「サポート力パワーアップシート」に示す具体的な動きは、無数にあるため、児童に理解しやすくするために、表2のように分類して、提示する。

表2 「サポート力パワーアップシート」に示す動きの分類

分類	具体的な動き
Lの動き	・前に動いて、横のスペースに走りこむ。 ・横へ動いて、前のスペースに走りこむ。
Vの動き	・右（斜め前）へ動いて、左（斜め前）のスペースに走りこむ。 ・左（斜め前）へ動いて、右（斜め前）のスペースに走りこむ。
Iの動き	・前へ動いて、後ろのスペースに走りこむ。 ・後ろへ動いて、前のスペースに走りこむ。

サッカーカシート	
サポート力	
4	ボールを持った人と自分の間に守る相手を入れないようにして立って、パスを受けることができる。
3	ボールを持った人と自分の間に守る相手を入れないようにして立つ。
2	動いているが、ボールを持った人と自分の間に相手がいる。
1	動いていない。
ビューティフルサポート力	
4	得点しやすい場所に走りこんで、パスを受けてシュートができる。
3	得点しやすい場所に移動して、パスを受けてシュートができる。
2	得点しやすい場所に移動して、パスを受けるがシュートができない。
1	得点しやすい場所に移動するが、パスが受けられない。
ディフェンス力	
4	ボールを持った人と守るゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぎ、クリアすることができる。
3	ボールを持った人と守るゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐことができる。
2	ボールを持った人より自分のコート側で守ることができる。
1	ボールを持った人より、自分のコート側にいない。
パス力	
4	遠くにいるフリーの味方にパスができる。
3	近くにいるフリーの味方にパスができる。
2	近くにいる味方を見つけパスをするが、パスが通らない。
1	近くにいる味方を見つけることができず、パスができない。
ドリブル力	
4	相手にとられない位置でドリブルし、空いているスペースにボールを運ぶことができる。
3	相手にとられない位置でドリブルできる。
2	ドリブルはできる。
1	ドリブルができない。
ワクワク力	
4	ルールを守り、助け合いながら、進んで運動に取り組み、楽しむことができる。
3	ルールを守り、助け合いながら、進んで運動に取り組むことができる。
2	ルールを守り、進んで運動に取り組むことができる。
1	ルールを守り、運動に取り組むことができる。
作戦力	
4	ルールを工夫したり、チームの作戦を考えたり両方できる。
3	ルールを工夫したり、チームの作戦を考えたりどちらかができる。
2	友だちと話はするが、ルールを工夫したり、チームの作戦を考えたりできない。
1	友だちと話さない。

### 課題発見シート

サポートに入ったら「サポート」に○。サポートした人にパスが出たら「パス出」にも○。また、そのパスを受けたら「パス受」にも○。そして、その後シュートまで打ったら「シュート」にも○。入ったら○

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
サポート																				
パス出																				
パス受																				
シュート																				
項目	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	計
サポート																				
パス出																				
パス受																				
シュート																				
運動量（歩数計）																				

↓  
<合計から気づくこと>

↓  
<原因>

↓  
課題

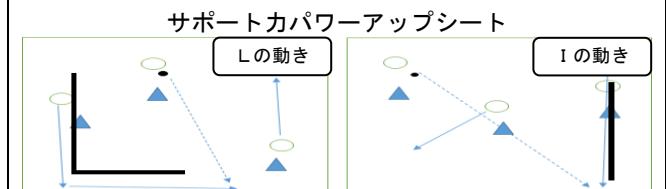


図1 「サッカーカパワーアップシート」

広島県教育委員会（平成28年）「広島県教育資料」では、課題発見・解決学習には、課題の設定、

情報の収集、整理・分析、まとめ・創造・表現、実行、振り返りなどの活動があり、「これらは、いつも順序よく形式通りに繰り返されるわけではなく、順番が前後することもあるし、一つの活動の中に複数のプロセスが一体化して同時に行われる場合もある」<sup>5)</sup>と示されている。そこで、このプロセスを基に、本研究における一時間の授業の流れを、表3に整理した。

表3 本研究における「課題発見・解決学習」の過程

実行	課題を解決するための練習方法を選び、サポート力パワーアップシートの動きをヒントに練習したり、ゲームをしたりする。
情報の収集	課題発見シートを使い、ペアの友だちの動きを観察し、記入する。
整理・分析・表現	課題発見シートに従って、データを取り、友だちや以前の課題発見シートのデータと比べ、分析する。
課題の設定	課題発見シートに従い、データから気付いたこと、原因を友だちと一緒に話し合いながら考え、課題を見付ける。その際、サポート力パワーアップシートの動きを参考にしながら考える。
振り返り	課題についての振り返りを、サッカーカーシートを基に書き、自分の技能レベルを把握するとともに、ループリックを参考に、自分の動きを評価する。

この過程は、「ボールを持たないときの動き」を身に付ける段階で繰り返され、スパイラルに高まっていくようになる。

「実行」の場面では、課題を克服するために、「サポート力パワーアップシート」の動きや、それをヒントにして見付けた新たな動きを、タスクゲームなどの練習やゲームに生かしていく。これらの練習を繰り返すことにより、「ボールを持たないときの動き」を身に付けていく。新しい動きを見付けた時は、「サポート力パワーアップシート」に付け加える。表2の動きをしてもパスがもらえない児童には、表4の守備者を振り切る動きのパターンも提示し、個別の課題に対応し、技能の向上を図っていく。これらも、新たな動きを見付けた時は、「サポート力パワーアップシート」付け加えていく。

表4 守備者を振り切る動きのパターン

パターン	具体的な動き
スピードの強弱	・ゆっくり後ろ(前)に動いて、急に速く前(後ろ)に走る。 ・ゆっくり右(左)に動いて、急に速く左(右)に走る。
フェイント	・右(左)へ動いて、左(右)へ走る。 ・前(後ろ)へ動いて、後ろ(前)へ走る。
体を反転	・右(左)へ体を開いておいて、左(右)へ体を反転させて走る。

「情報の収集」の場面では、ペアの友だちがゲームをしている間、課題発見シートに「サポートした数」「パスが出た数」「パスを受けた数」「シュー

トにつながる動きができた数」「運動量(歩数計)」を記入していく。

「整理・分析・表現」の場面では、「情報の収集」の場面のデータを基に、友だちや前回の自分のデータと比べる。さらに、なぜデータに増減があったのか原因を分析する。

「課題の設定」の場面では、原因を分析したことを基に、サポート力パワーアップシートを参考にして、「ボールを持たないときの動き」の課題を、友だちと話し合いながら、課題発見シートに記入する。

「振り返り」の場面では、身に付けるべき技能とループリックが明示された「サッカーカーシート」を使う。その日の自分の技能レベルを点数化し、課題に対して自分の動きを評価する。

### (3) 「サッカーカパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習と技能の向上

岡出美則(1994)は、「できる」ためには、「わかる」ことが必要であり、「わかる」ことを「できる」に結び付けていく配慮がいることを述べている<sup>(13)</sup>。

「できる」ことを技能の向上とすると、技能が向上するためには、まずは、「わかる」ことが必要であるといえる。そして、その「わかる」を「できる」に結び付けるために、どんな学習指導を工夫していくかが大切であるといえる。

「サッカーカパワーアップシート」の活用によって、一人一人が自分の課題を明確にとらえ、課題意識をもって、主体的にタスクゲームなどの練習に取り組むことができるようになる。これこそが、「わかる」を「できる」に結び付けていく学習指導の工夫だと考える。この学習過程が何度も繰り返され、スパイラルに高まっていくことで、「わかる」から「できる」になっていくと考える。

本研究における技能の向上は、指標として、「サッカーカーシート」で表1のアからオに当たる部分の評価基準や「課題発見シート」の記録の数値を使い、見取ることとする。

これらのことより、「サッカーカパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習を通して、技能の向上を図ることができると考える。

## III 研究の仮説及び検証の視点と方法

### 1 研究の仮説

ゴール型(サッカー)の単元において、「サッカーカパワーアップシート」を活用して、主に「ボールを持たないときの動き」の技能について、課題発見・

解決学習を行えば、課題意識をもって意欲的に練習に取り組み、技能が向上するであろう。

## 2 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表5に示す。

表5 検証の視点と方法

視点	検証の視点	方法
1	「ボールを持たないときの動き」の技能の向上は、図られたか。	・児童の振り返りノート ・児童の「課題発見シート」の記録 ・映像分析
2	「サッカーカーパワーアップシート」は、技能の向上のための課題発見・解決につながったか。	・アンケート ・児童の「課題発見シート」の記述 ・行動観察

## IV 研究授業について

### 1 研究授業の内容

- 期間 平成28年11月30日～平成28年12月21日
- 対象 所属校第5学年（1学級36人）
- 単元名 心をつなげ！ パスをつなげ！  
めざせビューティフルゴール！！
- 目標
  - ・簡易化されたゲームを行うための基本的なボール操作やボールを持たないときの動きによって攻防することができるようとする。
  - ・ゲームに進んで取り組み、ルールを守り、助け合って運動したり、場や用具の安全に気を配ったりすることができるようとする。
  - ・ルールを工夫したり、自分のチームの特徴に応じた作戦を立てたりすることができるようとする。
- 指導計画

次	一				二			三			四			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
0分	オリエンテーション ・コミュニケーション ・学習のねらい ・単元の流れ ・1時間の流れ ・ドリブル	準備運動、ドリブルゲーム ・ボール操作の技能の向上を中心とした運動	「ボールを持たないときの動き」 身に付ける (課題発見・解決学習)	「ボールを持たないときの動き」 身に付ける (課題発見・解決学習)	準備運動、ドリブルゲーム ・ボール操作の技能の向上を中心とした運動	「ボールを持たないときの動き」 身に付ける (課題発見・解決学習)	学習内容の確認	ゲーム 6対6	ゲーム 6対6	ゲーム 6対6	「サッカー大会」 6対6			
15分	・チームの選択 ・試合のゲーム ・試合の流れ	タスクゲーム 「ボール持たないときの動き」の技能の向上を中心とした運動 ・ボール無しゲーム (5対1, 4対2, 3対3) ・3対1, 2対1, 3対2, 3対3 ・スリーゴールサッカー (4対2, 3対3.)	「サッカーカーシート」 ・サポートカーパワーアップシート	タスクゲーム 「ボール持たないときの動き」の技能の向上を中心とした運動 ・ボール無しゲーム (5対1, 4対2, 3対3) ・3対1, 2対1, 3対2, 3対3 ・スリーゴールサッカー (4対2, 3対3.)	タスクゲーム 「ボール持たないときの動き」の技能の向上を中心とした運動 ・ボール無しゲーム (5対1, 4対2, 3対3) ・3対1, 2対1, 3対2, 3対3 ・スリーゴールサッカー (4対2, 3対3.)	「サッカーカーシート」 ・サポートカーパワーアップシート	チームごとの課題に合わせて選択	ゲーム 6対6	ゲーム 6対6	ゲーム 6対6	ゲーム 6対6			
30分	学習のまとめ	・課題発見シート	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集	情報の収集		
45分	学習のまとめ	・課題発見シート	整理・分析・表現 課題の設定	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り	振り返り		

## V 研究授業の分析と考察

### 1 「ボールを持たないときの動き」の技能の向上は、図られたか

#### (1) 児童の自己評価からの分析

図2は、「振り返り」の場面で、自己評価した三つの「ボールを持たないときの動き」の平均点を示したものである。

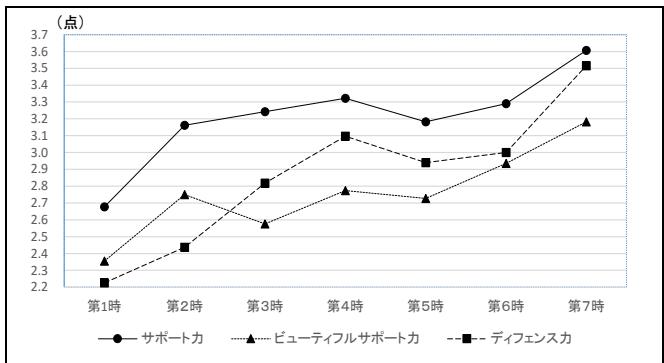


図2 「サッカーカーシート」の「ボールを持たないときの動き」の平均点の推移

第1時から第4時は3対3でゲームを行い、第5時から6対6にゲーム形態が変わり、内容が高度化したため、どの力も一度下がっている。しかし、その後、全体的にいずれの力の平均点も上がっている。つまり、児童は、「ボールを持たないときの動き」の技能が向上したと実感できていることが分かる。

#### (2) 児童の「課題発見シート」の記録からの分析

図3は、全児童が記録した「課題発見シート」の結果である。

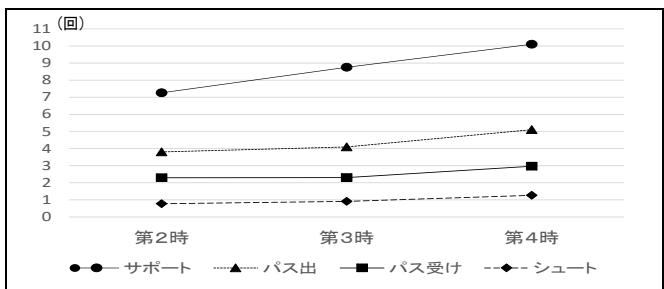


図3 「課題発見シート」において「ボールを持たないときの動き」ができた回数の平均の推移

「サポート」は、ボールをもらう動きができたことを示す。「パス出」は、サポートする動きをしてパスが出たが、つながらなかったことを示す。「パス受け」は、サポートする動きをして、パスを受けたことを示す。「シュート」は、シュートにつながったサポートの動きを示す。これらは、「ボールを

持たないときの動き」として、「課題発見シート」に回数を記録していったものである。

いずれも、回数の平均は上がっている。特に「サポート」する動きは、伸びが大きかった。

### (3) ビデオの映像分析

稿者が、第1時に児童の様子を撮影したものを「課題発見シート」を使って分析し、技能上位、中位、下位を分けた。図4は、技能上位、中位、下位の男女1名ずつ計6人の抽出児童による「ボールを持たないときの動き」の合計推移を表す。「ボールを持たないときの動き」の合計とは、図3にある動きと「ディフェンス」の合計である。「ディフェンス」とは、「サッカーカーシート」にある「ディフェンス力」の評価基準に基づいて、ボールを持たないとき、適切な位置取りでディフェンスしている回数を数えたものである。これらを合計したのは、ゲーム形態の変化により、チームごとで攻守の役割が分担され、攻守の役割によって「課題発見シート」の「サポート」と「ディフェンス」の数値に偏りが出たためである。

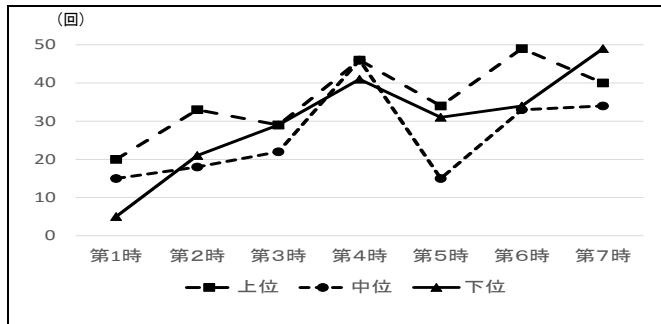


図4 「ボールを持たないときの動き」ができた回数

全体的には、上位、中位、下位の抽出児童とも技能が向上している。特に、下位の児童は、第7時になると、「ボールを持たないときの動き」の回数が、一番多くなっている。これは、サポート数が大きく増えていったためである。それは、上位の児童がボールを保持し、下位の児童にパスをするという役割分担が、各チームで行われたためである。チームで協力しながら、技能の向上を図ることができた。

以上、(1)から(3)より、「ボールを持たないときの動き」の技能の向上は、図れたといえる。

## 2 「サッカーカパワーアップシート」は、技能の向上のための課題発見・解決につながったか

### (1) 児童のアンケートからの分析

図5は、「サッカーカパワーアップシートは、サ

ポート力の上達に役立ちましたか。」という質問項目の回答状況である。

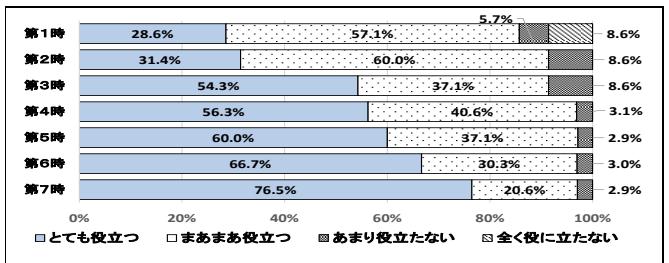


図5 技能の向上における「サッカーカパワーアップシート」の有効性に関する児童の意識の変容

課題発見・解決学習による技能の向上の有効性についての肯定的評価が、増加している。

図6は、高橋ら(2003)が開発した形成的授業評価の「今までできなかったことができるようになりましたか。」という質問項目の回答状況を示している。

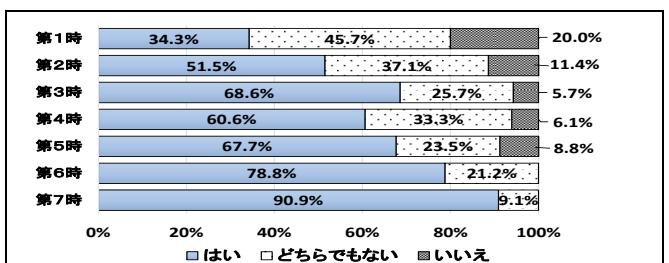


図6 形成的授業評価の「技能の向上」の児童の割合の変容

「技能の向上」の肯定的評価が、増加している。ピアソンの相関係数は、一般的に0.8以上で大変高いと解釈されるが、これら二つの量的変数は0.90で、正の相関がある。

つまり、児童は、「サッカーカパワーアップシート」を活用したことによって、技能を向上させることができたと感じているといえる。

図7は、「サポート力を上げる練習に意欲的に取り組みましたか。」という質問項目の回答状況である。

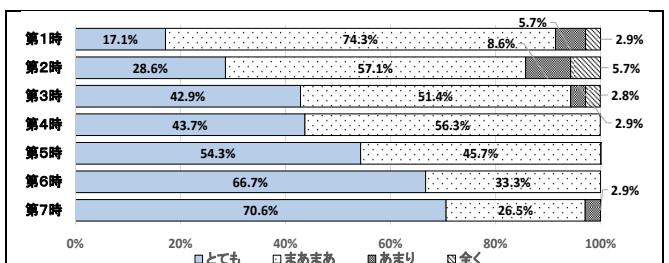


図7 意欲的に練習に取り組んだ児童の割合の変容

技能の向上を図る練習に意欲的に取り組む児童の

割合が、増加している。図6の形成的授業評価の「技能の向上」との相関係数は0.93で、正の相関がある。

つまり児童は、意欲的に練習に取り組んだことで、技能が向上したと感じているといえる。

図8は、「自分のめあてに向かって何回も練習できましたか。」という質問項目の回答状況である。

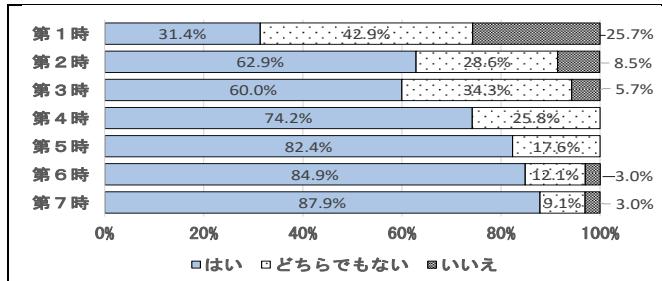


図8 課題意識をもって意欲的に練習に取り組んだ児童の割合の変容

課題意識をもって、練習に取り組んでいる児童の割合が増加している。形成的授業評価の「技能の向上」との相関係数は0.87で、正の相関がある。また、図7と図8、図5と図8の相関関係は、それぞれ0.85、0.94で正の相関がある。

つまり児童は、「サッカーカーパワーアップシート」を活用して、課題をもつことができ、課題意識をもってたことで意欲的に練習に取り組み、技能を向上させることができたと感じており、課題解決につながったといえる。

## (2) 児童の「課題発見シート」の記述と授業の様子からの分析

表6は児童が、「課題発見シート」に、データから課題を見付けるまでの記述を示したものである。

表6 児童の「課題発見シート」の記述

時	児童	合計から気付くこと	原因	課題
第2時	a児	サポート、パスを受ける回数が、友だちより少ない。	止まっている時がある。	「L」や「I」の動きをし、相手から離れる。
第3時	b児	歩数計の数が減り、シュートが0だった。	自陣のゴール前にいることが多い。	味方がボールを持ったら、ゴール前に走る。
第4時	c児	サポートは増えたが、パスが、受けられない。	相手にマークにつかれていく。	相手に気付かれないように動く。

a児の記述は、第2時のものである。「課題発見シート」を活用した初めての時間なので、課題を見付けるために、友だちのデータと比較して気付きを書き、原因を考えている。「サッカーカーパワーアップシート」を活用することで、「L」や「I」に動くという「ボールを持たないときの動き」について

の課題を見付けることができた。

b児の記述は、第3時のものである。前時の自分のデータと比較して、気付きを書いている。そこで、「サッカーカーシート」の「ビューティフルサポート力」の評価基準を参考にすることで、「ゴール前に走る」ことができていないという原因に気付くとともに課題を設定することができた。授業の振り返りで、b児の課題を取り上げ、「ビューティフルサポート」の動きとして全体で共有し、付け加えた。

c児の記述は、第4時のものである。c児の記述が発端となり、第5時、第6時と新しい動きが加わっていった。c児が、課題を見付けるまでの話合いの一部と、その後「ボールを持たないときの動き」が付け加わっていった授業の様子を図9に示す。

<第4時>	
c児	:運動量も増えたし、サポートの数も増えているのに、なぜ、パスがもらえないの?
d児	:動いているけど、相手のマークが外せていないから、パスができないよ。
教師	:だったら、cさんは、どういう動きをすれば、パスがもらえるようになるの?
e児	:前の時間の振り返りで言っていた「相手に気付かれないように裏へ走る」をすればいいよ。 ~授業の終わりに全体に問題提起~
<第5時>	
教師	:cさんが言っている「裏へ走る」方法以外には、相手のマークを外す方法ってないかな。
f児	:バスケットボールの時みたいに、動きに強弱をつけたらいいと思います。
g児	:だったらフェイントをかける方法もあったよ。
教師	:そうだね。ほかにも、体を反転させる方法もあるよ。(見本を見せる)じゃあ、この動きを今日の練習やゲームでチャレンジしてみよう。 ~h児が、振り返りノートに、練習やゲームを通して相手のマークを外す動きについて気付いたことを書く。次の時間で取り上げることにする。~
<第6時>	
教師	:h君、前回の授業の振り返りで、相手のマークを外す動きで気付いたことがあったよね。みんなに発表してくれるかな。
h児	:パスしたら、すぐに走って、また次のパスをもらえばいいと思います。
教師	:なるほど。では、その動きを「パス&ゴー」として付け加えよう。今日は、この動きも練習やゲームでチャレンジしてみよう。

図9 「課題発見シート」記入後の話合いの様子

図9に示すとおり、「課題発見シート」を活用したことで、「ボールを持たないときの動き」について、新たな気付きをもつことができた。その気付きから、話合いを通じて原因を考え、新たな課題もてた。個の課題を全体の課題として共有し、全児童が、課題意識をもって練習に取り組むことができた。

第2時から第4時に、「サッカーカーパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習を通して、「ボールを持たないときの動き」を増やしていくことができた。全体で共有して付け加えた動きについて

て、図10に示す。

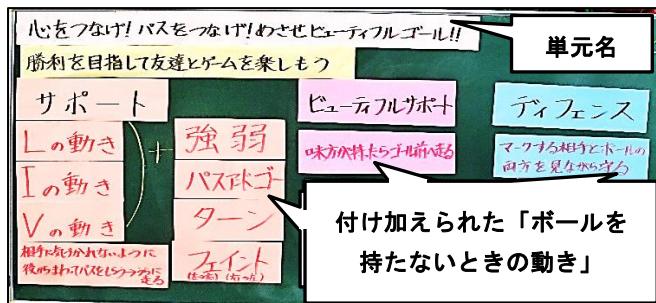


図10 第7時の板書

児童の振り返りノートには、「Lに動いたら、パスがたくさんもらえた。」「Iの動きでゴール前行ったら得点できた。」「強弱の動きで、マークを外すことができた。」と書かれていた。課題意識をもって、意欲的に練習したりゲームをしたりしたことによって、「ボールを持たないときの動き」ができるようになったことが分かる。表7は、c児のその後の振り返りノートに書かれていたものである。

表7 c児の振り返りノートの記述

時	課題	振り返り
第5時	相手に気付かれないように動く。	ひたすら動くことに必死でできませんでした。～中略～今度こそ相手に気付かれないように移動しようと思います。
第6時	相手に気付かれないように動く。	今日こそこのめあてが達成できました。ほかのめあてにしてもこれからできたらいいなと思います。
第7時	i君の反対側に動く。	今日は後半、守りを主にやっていたけど、前半、ちゃんとi君を意識してできたと思うし、相手の裏側を走ることを忘れずできました。

第5時の課題は、第6時には解決できた。第7時には、自分の動きだけでなくチームとして連動して動くというレベルの高い課題をもてた。振り返りノートを見ると、今までの「相手に気付かれないように動く」も意識しながら、レベルの高い「ボールを持たないときの動き」の課題が解決できているのが分かる。

このようにして、「サッカーカーパワーアップシート」を活用したことによって、課題に気付くことができ、課題意識をもてたことで意欲的に練習に取り組み、課題を解決することができた。

(1) (2) より、「サッカーカーパワーアップシート」は、技能の向上のための課題発見・解決につながったといえる。

## VI 研究のまとめ

## 1 研究の成果

「サッカーカーパワーアップシート」を活用した課題発見・解決学習は、ゴール型（サッカー）における技能の向上に有効であることが分かった。

## 2 研究の課題

- 「課題発見シート」を使い、課題を見付けていく際、教師の支援や時間を要する児童がいた。今後は、課題を発見させる手立てを工夫する必要がある。具体的には、見る視点や比べる視点を示した「課題発見補助シート」の開発を進めていく。
- 本研究で作成した「サッカーカーパワーアップシート」を基に、他の領域や他学年でも活用できるように引き続き研究に取り組んでいく。

### 【注】

- (1) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領解説体育編』東洋館出版社p. 10を参照されたい。
- (2) 中央教育審議会（平成28年）：『体育・保健体育、健康、安全ワーキンググループにおける審議の取りまとめ』p. 3を参照されたい。
- (3) 文部科学省（平成20年）：前掲書p. 18を参照されたい。
- (4) 文部科学省（平成20年）：前掲書p. 10を参照されたい。
- (5) 小谷川元一（1994）：「六年生のサッカーの授業」『体育科教育[別冊]1994年. 9』大修館書店p. 72を参照されたい。
- (6) 林俊雄（2014）：「サッカーの教材史を辿る」『体育科教育』10月号 大修館書店p. 15を参照されたい。
- (7) 松本靖・後藤幸弘（2007）：「戦術の系統に基づいて考案されたサッカー『課題ゲーム』学習の有効性—高学年児童を対象として—」pp. 100-101を参照されたい。
- (8) 文部科学省（平成20年）：前掲書p. 18を参照されたい。
- (9) 文部科学省（平成20年）：前掲書pp. 73-74を基に稿者が作成。
- (10) 文部科学省（平成22年）：『学校体育実技指導資料第8集ゲーム及びボール運動』東洋館出版社p. 3
- (11) 文部科学省（平成27年）：『教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）』p. 8を参照されたい。
- (12) 広島県教育委員会（平成26年）：『広島版「学びの変革」アクション・プラン』p. 8を参照されたい。
- (13) 岡出美則（1994）：「第3章わかるとできるの統一」『体育の授業を創る』大修館書店pp. 130-131を参照されたい。

### 【引用文献】

- 1) 塩野克己（1996）：「第II章 動きに構造を見つける」『教師のための運動学』大修館書店p. 68
- 2) 文部科学省（平成20年）：前掲書p. 18
- 3) 吉永武史（2009）：『学習内容の転移を企図するボールゲームの教材配列』『体育科教育1月号』大修館書店p. 38
- 4) 中央教育審議会（平成28年）：前掲書p. 3
- 5) 広島県教育委員会（平成28年）：『平成28年度広島県教育資料』p. 95

### 【参考文献】

- グリフィン, L. L編(高橋健夫・岡出美則監訳) (1999)『ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方—』大修館書店  
 高橋健夫編 (2003) :『体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』昭和出版  
 大井一徳・松田泰定 (2008) :『デジタル教材及びデジタルポートフォリオを活用した体育授業の有効性の検討—小学校4年生の跳び箱運動の授業を対象として—』『スポーツ教育学研究第27巻第2号』  
 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編 (2010) :『体育科教育学入門』大修館書店